小学校日本語教室における NIE 実践
− 切り抜き新聞の制作 −

神 部　秀 一・佐 藤　久 恵・所 澤　潤

NIE Practice in a Japanese as a Foreign Language Class at Japanese Elementary Schools : A Report on Newspaper - Clipping Activities

Shuichi Kambe, Hisae Sato and Jun Shozawa

要旨

本稿は、2016 年度から 2017 年度まで我々が実施した群馬県及び愛知県の公立小学校日本語教室 NIE 実践について、その内容及び成果と課題を報告するものである。実践は群馬県の公立小学校で 2016 年 11 月に 5 年生で実験的に着手し、その後、2017 年には 2・3 年生、4・5 年生、そして 6 年生を対象に進めた。また 2017 年度には愛知県の公立小学校でも着手した。その結果、小学校日本語教室で「切り抜き新聞」を主とした NIE 活動が実施可能なばかりか教育的効果を持ちうるものであることが明らかになった。これは、従来多い訓練型や相談型の授業とは全く異なるものである。但し、児童の書く「コメント」は、音声言語の文字化の域を出ていなかった。この点については、「特別の教育課程」で周到に計画を立てるという新たな課題が浮かび上がった。

キーワード
外国籍児童生徒、日本語教室、NIE（教育に新聞を）、群馬県、愛知県

1. はじめに

(1) 研究の目的

本稿は、2016 年度から 2017 年度まで我々が行った小学校日本語教室 NIE の実践について、その内容及び成果と課題を報告するものである。

本研究の究極の目的は、外国籍児童生徒のための日本語指導教室（以下、日本語教室）の授業を豊かにすることにある。ここでいう「外国籍児童」は、より厳密にいえば「外国にルーツをもち、日本語を母語とせずに育った児童」である。国籍は日本となっていても日本語が不十分であるために日本語教室に通級する児童生徒がいること、一方で国籍は日本でなくても日本語を母語として育っている児童生徒は検討の対象としていない。本研究の具体的な目的は、日本語教室に NIE（教育に新聞を）を導入して、通常学級で行われる授業と同等の質をもった授業を日本語教室で実現しようとするものである。

ふだん、日本語教室では、必要に応じて、個別に児童生徒を取り出して反復学習や補充学習を行う、いわば訓練型の指導が行われていることが多い。また、クラスに馴染めない児童生徒へ、指導助手に母

語で会話をしてもらって心の安定を図る、個別相談型の指導が行われていることもある。もちろん、そうした訓練や相談も、外国籍の児童にとっては必要で大事な指導であろう。そのような指導を否定するものではない。しかし、正規の教諭が担当して日本語教室で授業が行われている以上、担当教師の力量を十分に発揮できる授業が実施される余地があるのではないか、と考えている。本研究は、日本語教室にそのような授業を生み出すことを目的としている。

（2）日本語教室における授業改善の試み

筆者の一人である所澤は、かねてから日本語教室に、訓練型、相談型を超える授業を具体的に創造する可能性と必要とを感じており、2008 年から 2013 年まで、群馬大学の教職大学院で、多文化共生領域の指導を担当していた際に、小学校日本語教室の授業改善に携わった経験をもっている。現職教員院生に、自らの授業センスを生かして、日本語教室に創意工夫のある授業を創出するよう促し、そして実際に、院生らは、通常学級で行われている授業と同様の授業を日本語教室で試行させた。訓練型指導でなく、個別相談型指導でなく、1 単位時間の中に、一斉教授の授業を試行させたのである。それらの一部は、すでに当時の報告書に記録され、公開されている[(1)]。

今回、我々は、そのような授業を日本語教室で実現するための 1 つの方法として、日本語教室に NIE を導入することを企画した。

（3）NIE の導入理由と導入内容

NIE を選んだ理由は、我々 3 名の筆者がそれぞれ現任の大学の講義の中で NIE を実践していること、そしてそればかりでなく所澤が群馬県 NIE 推進協議会会長の経験を有していること、神部が東京新聞社の NIE コーディネーターとして、実際に小学校の NIE 指導の経験をもっており、学校教育に於ける NIE の可能性を強く感じていることがあるが、それ以外に以下 3 点を挙げておきたい。

①日本の NIE は、1985 年の開始以来 30 年以上の歴史があり、実践の蓄積があること。幼稚園・小学校低学年から大人まで、新聞で遊ぶ、新聞を作る、記事を比較する等々、学習内容に、それぞれの年齢で取り組める幅広さがあり、外国籍の子どもでも取り組める可能性があること。

② NIE は、通常学級で扱う教科書とは異なるため、通常学級に戻すための反復・補充学習ということから離れて、全く独自の授業、独自のプログラムを開発できる可能性があること。

③ NIE は、授業中に、好きな記事を探したり、線を引いたり、切ったり貼ったりという主体的な活動を取り入れられる。すなわち、学びの質が受け身のものから、アクティブラーニング型のものに切り換えやすいこと。

本研究では試行的な実践という条件もあったため、取り入れた NIE は、新聞スクラップ（A3 用紙を台紙とする新聞スクラップ）、新聞切抜き作品（コンクールに応募する模造紙大の作品）、及びはがき新聞、の 3 つであった。

（4）本稿の内容及び構成

本稿では、第 1 に、2016・2017 年度の群馬県伊勢崎市立広瀬小学校（以下、広瀬小）での実践について行った成果と見出した課題を報告する。ただし、2016 年度の広瀬小実践については、別に、その詳細を報告する予定であるため、2016 年度の実践はその概略を紹介するに止め、2017 年の実践について、詳細に述べることとする。

第 2 に、2017 年度後半に愛知県の 3 小学校で実施した日本語教室 NIE について、その内容及び成果と課題を報告する。但し、愛知県での実践は、愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム主催の研修会が契機になっているため、先にその内容を報告する。神部は、2017 年 11 月に愛知教育大学で「外国人児童生徒支援にかかる研修会」が実施された際、招聘講師として「日本語教室における NIE の実践」と題して広瀬小での実践を報告した。愛知県の 3 小学校の実践は、それを受けて出前授業を要

請され、実施したものである。

第 4 節では、それらの実践を通して得られた成果と課題をまとめることとする。

2. 伊勢崎市立広瀬小学校の実践

我々は、広瀬小日本語教室で外国籍の児童を対象に、2016 年度より 2018 年度の現在に至るまで継続的に NIE を行ってきている。まず、2016 年度の実践の概略を紹介する。

（1）広瀬小 2016 年度の実践

2016 年度は 11 月と 2017 年 1 月の計 2 回、日本語教室 NIE を行った。対象は､5 年生児童 5 名であった。生活日本語はある程度身に付いているが、学習日本語はあまり身に付いていない。内 1 名は、来日してまだ日が浅かった。

第 1 回目の実践は、2016 年 11 月 25 日（金）、3 校時に実施した。授業のめあては「面白そうな記事をいっぱいスクラップしよう」とした。授業は次のように展開した。（ア）新聞で「メキシカンハット」を作って遊ぶ、（イ）教師が用意した記事について教師がコメントを書き入れるのを見る、（ウ）自分で記事を探して、切って貼る、（エ）自分でコメント、タイトルを入れる、（オ）感想を発表する、である。

授業終了後、広瀬小の矢島祐介校長から次の評価を得た。「ほとんど新聞に接したことのなかった子ども達が、予想よりもはるかに貪欲に新聞記事を読み、切り抜き、貼り合わせ、そして内容を発表することに興味関心を示した。児童の成長ということを考えると、本当は、こんな授業をしなければならない」と。さらに「もし、第 2 回目を実施したら、この子どもたちは､どのような作品を作るのだろうか」と。校長からそのようにして 2 回目の授業の提案があって広瀬小での継続的な実践が始まることとなった。

第 2 回目の実践は、2017 年 1 月 27 日（金）5 校時に行った。対象児童は、第 1 回目と同じ 5 年生の 5 名であった。授業内容は前回を踏襲したが、コメントを書く際に、日本語と自分の国の言葉で書くようにと指示を加えた。「日本語で書く」というところに日本語能力の向上、「自分の国の言葉で」というところに母語保持の観点を組み込んだのである。

（2）広瀬小 2016 年度の成果

2016 年度の 2 回の日本語教室 NIE は、日本語学習を楽しい学習として成立させている点や、外国籍児童の自己理解を促進させている点に特徴があったといってよい。実践で得た成果は､以下の 2 点であった。

① NIE を取り入れた日本語学習は授業が成立していた。「一般紙」「こども新聞」「広告」の 3 種を用意して児童に選ばせたところ、児童は、「こども新聞」を選んだことから、日本語教室 NIE では､「こども新聞」の教材としての可能性が示唆された。
②切り抜き新聞における母語使用も教育的に有効であることが示された。

本実践のような NIE を繰り返すことで、コメントに書かれる内容も、深まりを見せる可能性が感じられた。

（3）広瀬小 2016 年度の日本語指導上の課題

NIE を通して、日本語指導上明らかになった課題は、以下の 2 点であった。

① 音声言語（話し言葉）を文字化して文字言語（書き言葉）に直せるようにする指導が必要である。

② 漢字・仮名の表記上では、1 回目と 2 回目との 2 カ月間に、進歩が認められなかった。また正しい筆順、画数も指導することが必要である。明らかになったこどもの弱点に合わせて、日本語能力の向上を図る指導が必要である。

（4）広瀬小 2017 年度の実践

2017 年度は、広瀬小での日本語教室 NIE 指導プログラムを確立することを目標にした。このプログラムが確立すれば、2018 年度以降も日本語教室 NIE が継続されよう。また、広瀬小ばかりでなく伊勢崎市の他の学校にも、汎用可能の実践プログラムとして、広まっていくことが期待できる。

そのため2016年度は、5年生5人を対象としたが、2017年度は対象児童を増やした。対象児童は、広瀬小の日本語教室に通う、2・3年（各5名）計10名、4・5年（各5名）計10名、6年（5名）である。2年から5年は、日本語教室担当教諭に日本語がよくできない児童を指名してもらい、6年は昨年度と同じ児童とした。

学習内容は、2・3年を初級コース、4・5年を中級コースとして別々の時間を設定し、共にA3用紙の新聞スクラップを制作することとした。初級は、新聞の記事・写真等を、中級は、自分の好きな記事を選ばせた。上級は、東京新聞社主催の「切り抜き作品コンクール」への応募作品を制作するという目標を立て、それにそった内容にした。

2017年5月23日、神部が広瀬小に事前訪問し、日程と内容の打ち合わせを行い、実施日を6月23日、9月22日、10月20日、2月9日の計4回と決定した。6年生は、年度途中に、11月16日、12月8日を追加し計6回とした。6年生の時数を追加したのは、コンクールに応募する作品制作に時間が掛かったためである。

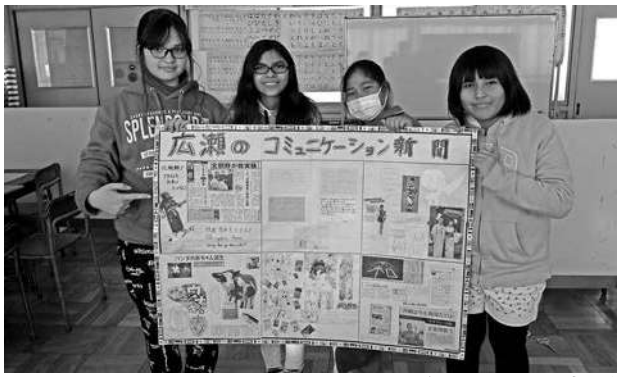
各コースの実施内容は次の通りであった。

【初級・中級コース（2年～5年）:「おすすめ記事を紹介しよう」】

2年から5年の初級・中級コースでは、「おすすめの記事を探して紹介しよう」「おすすめ記事に見出しを付けよう」という内容で、6月、9月、10月の計3回行った。授業の流れは、以下の通りである。（ア）こども新聞から記事を選ぶ。（イ）選んだ記事を切り抜く。（ウ）切り抜いた記事（1枚～2枚）をA3用紙に貼る。（エ）貼った記事の脇に感想を書き入れる（日本語、自分の国の言葉で）。（オ）題を付ける。（カ）交流する。同様の活動を3回行うことで切り抜き新聞の習熟を図った。

【上級コース（6年）:「切り抜き作品を制作しよう」】

上級コースは、コンクール作品の制作に向けて次のように進行させた。まず、模造紙から見出し部分を切り取った。残り部分を6等分し、5名がそれぞれ1枚ずつ自分の分担箇所として仕上げることとした。本来、切り抜き作品は、グループでテーマを決めて、記事を探し、コメントを書き、レイアウトを考えて作品を完成させるという協同作業となるものであるが、外国籍児童は取り出しで日本語教室に来ているため、5人が同時に集まる機会が少なく、その手順では進行させられない。そこで、それぞれが自分の分担箇所を完成し、最後に貼り合わせることとした。作業は次のような流れで行わせた。（ア）個人の分担箇所について、記事を貼り付けて、日本語（日本語能力の向上）と自分の国の言葉（母語保持）で感想を書く。（イ）タイトルを皆で考える（交流）。（ウ）まとめの感想を書く。（エ）余白部分を、感想や絵で埋めて完成させる（交流）。この流れに沿えば、「日本語力の向上」「母語保持」「交流」という観点で授業を展開できると思われたのである。作品制作は、6・9・10月の3回では終了せず、11・12月に追加の時間を設定して完成した。図1が、完成した作品である。



2017年12月8日撮影

図1　完成した切り抜き作品（上級コース）

2018年2月の第4回は、「はがき新聞（大判）」(注1)を初・中・上級コースすべてで実施した。テーマは「今年一番楽しかったこと」とした。楽しかったことをいくつか振り返れるようなワークシートを用意し、あらかじめ書かせ、そのあとではがき新聞を制作した。図2及び図3は、中級コース（4年）のA子の作品である。A子は、2017年10月には、日本語ができなかったが、2月の時点ではかなり書けるようになっていることを知ることができた。

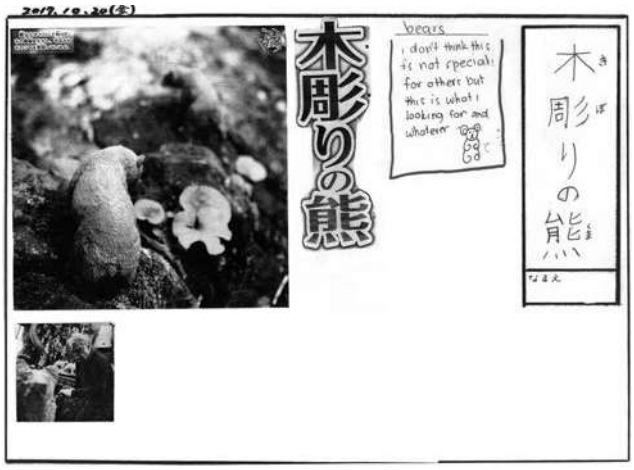


図 2　中級コース A 子（2017 年 10 月）の作品

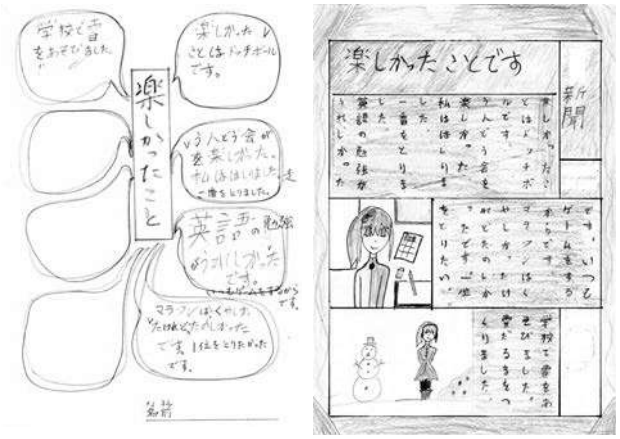


図 3　中級コース A 子（2018 年 2 月）のワークシートと「はがき新聞」作品

新聞の切り抜きも、回数を重ねることで上達しており、また、はがき新聞の作成も可能となった。

（5）広瀬小 2017 年度の成果

2017 年度の広瀬小実践を通して、以下 4 点の成果を確認した。

①「切り抜き新聞」作りは、訓練型・相談型の授業とは異なる日本語教育授業を日本語教室で実施することが可能であることを示している。2017 年 12 月、6 年生の作品が完成したとき、ある児童がつぶやいた。「これ、授業だったの？　私は、遊びだと思っていた」と。子ども自身がこの授業を楽しいと認識し、楽しい活動の中で日本語の学習をしていたことが分かる言葉であった。

②「切り抜き新聞」作りという活動は、交流場面を生み出す実践となることが確認された。選んだ記事や写真の比較、日本語表現の教え合い、他言語への興味、道具の貸し借り等々、個別学習が多い取り出し授業の中に、児童同士の学び合いが起こった。作品の完成という目標設定が、自然な形で協働態勢を図ることに寄与していたと考えられる。

③「切り抜き新聞」作りの過程で、自身の日本語力の向上を自覚できる可視化が発生していた。図 2 は、全く日本語が書けずに入学した児童が、その時点でどの程度日本語を習得していたかを示している。NIE を複数回設定することで、こうした成長の過程を本人にも周りにも可視化することができた。

④「切り抜き新聞」作りは、母語保持のための教育ともなることが確認された。

（6）広瀬小 2017 年度の課題

以下のような課題が見出された。2 点示す。

①日本語学習、とりわけ文字言語の習得という点については、「切り抜き新聞」作りがほとんど機能していないのではないかと思われた。「秋」「僕」という漢字を間違えた 4 年生がいたので、その場で訂正させたが、現在は日本語指導の必要な児童にも「特別の教育課程」を設けることとなっているので、ふだんの日本語指導で並行して漢字の習得をさせつつ、「切り抜き新聞」作りを行うような体制を設けるべきではないかと思われた。

②「切り抜き」授業が、息抜きの時間に陥る虞も感じられた。児童の「遊びだと思っていた」という発言は、授業に没頭できるということを示している一方で、授業が成立していない状態に陥る可能性も考えさせられた。その意味でも、切り抜き新聞を「特別の教育過程」の中に位置づけることが必要ではないかと思われた。

3. 愛知県での日本語教室NIEの実践

（1）愛知教育大学地域連携センター外国人児童生徒支援リソースルーム主催の研修会

2017 年 11 月 1 日、愛知教育大学地域連携センター外国人児童生徒支援リソースルーム（以下、リソースルーム）主催の「刈谷市・豊田市・知立市・豊明

市を対象とした平成29年度外国人児童生徒支援にかかる研修会」で、広瀬小での日本語教室NIE実践を紹介する機会を得た。筆者の一人である神部が講師を担当した。この研修会は、「外国にルーツをもつ児童生徒支援に関わるすべての先生方を対象とし、支援に対する意識の改革や、指導技術の向上を図」る目的で計画されたものである。

愛知県も、群馬県同様に外国籍児童生徒の多い地域である。リソースルームは、大学と連携している近隣市の小中学校へボランティア学生を派遣し、リソースルームのスタッフや学生が日本語教室に入って授業をしたり、外国人児童生徒の支援・指導を行ったりしている。外国籍児童生徒への教育に関して、小中学校との連携を図っている点や、上記の研修会を毎年開催している点など、外国籍児童生徒教育の愛知県での核の一つとなっている。本研修会へは、現職の教員・指導員、教育委員会、学生、リソースルームの関係者等、約40名が参加した。

研修会では、広瀬小実践を次の順序で紹介した。（ア）通常学級でのNIE授業、及びNIEの教育効果の説明、（イ）参加者の切り抜き体験、（ウ）広瀬小日本語教室での実践紹介。

なお、（イ）で記事に参加者がコメントを書く際に、参加者自身のコメントを書くのではなく、次のようにお願いした。「自分の学校の児童生徒、たとえばA君を想定してください。A君には、こんなことを、こんな表記で書いてほしいという具体像をもってコメントを書いてください」。これは「特別の教育課程」を意識して、児童生徒一人ひとりの日本語力を向上させることを想定したもので、広瀬小での課題を踏まえたものであった。

この研修会での発表は好評を得た。参加者の感想の主なものを要約して紹介する。

〔参加者の感想〕（／毎に別の参加者）

日本語教室でNIEが可能かと思っていたが、受講後にはその可能性を感じられた／思った事、感じたことを書かせるところからスタートすればよい／興味深い内容。生徒たちも、多分意欲的に取り組めると思う／A4サイズで単発完結でやってみたい／子どもの興味・関心を生かして日本語に慣れさせていける／子ども新聞を定期購読しよう／子どもたちの関わりを生み出すNIE実践は、重要な観点を含んでいる／自己肯定感を高めるよい方法／読むこと、書くことの基礎スキルのある児童生徒には効果がある／等々

感想の中で神部にとって印象的だったのは、「NIEと聞いて、難しいのではと心配していた」「NIEを取り入れて授業をできるのか」という、当初の懸念が、研修会後には、「とても面白い」「子どもたちが退屈せずに取り組める」「『なるほどな』と思った」「NIEで、授業ができる」と変わったことである。研修会直後に、参加者から神部への講師依頼も来た。自分の学校でも、実施してほしいという要望である。これも、日本語教室NIEが実践的で有効な方法と参加者が感じた証左であるといえよう。

こうして、リソースルーム主催の研修会が契機となって、愛知県小学校でも日本語教室NIEの実践が始まることになった。我々の実践は群馬県から愛知県へと広がった。

（2）愛知県小学校での実践

2017年12月から2018年1月にかけて、神部は、愛知県小学校3校で日本語学級NIEを実施した。12月15日（金）の高浜市立A小学校（以下、A小）、2018年1月23日（火）の豊田市立B小学校（以下、B小）、1月26日（金）の安城市立C小学校（以下、C小）の3校である。ここでは、広瀬小での実践を踏襲して同じ内容、同じ展開で実施し、その結果で広瀬小と同じような展開が得られるのかどうかを確認することにした。

以下に、A小の担当教諭からのレポートと児童の作品、C小の担当教諭からのコメントと写真、及び、B小で得た課題を示すこととする。

（3）A小、C小での指導

A小学校

授業後、A 小の担当教諭は、自身の実践レポートを 2 回送ってくださった。以下に児童作品（図 4）と合わせて紹介する。

【A 小の担当教諭のレポート（一部要約）】

①「日本語教室での NIE 学習」（2018 年 1 月 9 日）

用いた新聞は『CHUNICHI こどもウィークリー』である。メキシカンハットに心を奪われたようで授業中も、授業後も被ったまま教室へ戻って行った。授業が楽しかったということが伝わってきた。A3 用紙（白紙）に、興味を持った記事や写真を切り抜き、日本語や母語を使って感想を書かせた。「こあそうな顔（こわそうな顔）」と「かっこいくて（かっこよくて）」など単語の間違いがあった。スクラップ新聞の発表から、日本語のつまずきを知ることができた。また、母語を使って発表することで、日本語が分からずつまずいているのか、児童の能力（表現力・言語力）なのか判断でき、今後の学習にも繋げていけると感じた。神部先生が「先生が仕上げをしてあげるから」と枠を一人一人に書くと、児童はとても嬉しそうだった。白紙の用紙から始めて、最後に枠を書いて作品を完成させることが、達成感を味わわせる方法でもあると発見できた。

NIE スクラップ新聞ばかりに時間を費やすことは難しい。今後は月に 1 ～ 2 枚のスクラップ新聞を完成させたい。スクラップ新聞作りと日本語学習を繋げる方法として、週 1 回は絵本の読み聞かせをし、日本語に馴染ませ、聞き取る力や読み取る力を向上させたい。また、毎時間の授業の振り返りを一行日記で書くことで、書く力も向上させたい。（後略）

②「日本語教室 NIE　スクラップ新聞 1 月号」（2018 年 2 月 1 日）

（前略）少し日本語が理解できるようになってきている児童には、記事を読むように声をかける。読んでいて分からない言葉は、教師や友達に聞く、ノートに書き取らせる。その後、どの記事、写真を切り取るか考え、レイアウトして、記事や写真について自分の思いや考えを母語や日本語で書かせた。週一回の絵本の読み聞かせ、授業の振り返りの一行日記を続けていることもあり、少しずつ自分の思いや考えが書けるようになってきた。友達同士で聞き合ったり、教え合ったりする姿もみられるようになった。付箋にコメントを書いて互いの新聞に貼ることも楽しそうにできた。日本語理解が難しい児童は、母語で書いた文を教師が日本語に翻訳し視写させている。出来上がった新聞は、在籍学級に持ち帰り、紹介してもらっている。担任の先生に「すごいね」「上手だね」と声をかけてもらうだけでも達成感を感じているようだ。引き続き毎月一枚の新聞を完成させていく中で、書く力、読む力の向上を目指していく。

図 4　愛知県 A 小 3 年生児童の作品

これらのレポートから、以下の 5 点を確認した。

①我々の意図している日本語教室NIEが、A小でも成立している。

②A小の担当教諭のように児童の母語について知識があれば、文字言語表現が稚拙でも母語の音声言語表現から、児童の能力を判断できる。

③NIEとふだんの日本語教室の授業をどのように繋いでいくか、実践的に検討している。

④NIE「スクラップ新聞」を月に1回制作させている。そのため、1月号は、図4に見るようにかなり完成度が高くなっている。

⑤スクラップ新聞を在籍学級に持ち帰らせ、担任からも評価をもらえるように配慮している。

C小学校

次にC小での結果を示す。C小でも、日本語教室NIEは児童に好評だった。図5のように、メキシカンハットを被ってポーズをとる児童、私の説明に集中する児童の様子が見て取れる。担当教諭からは、「子ども達が1時間本当に楽しそうで、目が輝いていたのが印象に残っています。下校時も、メキシカンハットをかぶり、みんなに自慢をしていたそうです。今後、他の学年でもやってみようと思います。また、来年度からは、新聞を使った授業を継続していこうと思います」という言葉を頂戴した。

図5　愛知県C小での指導

（4）愛知県B小で得られた課題

B小学校

B小の平成29年度児童数は、平成30年1月現在で外国籍児童が66パーセント、なかでも1年・6年は7割を超えていた。そのようなB小の実践は、新たな課題が浮かび上がった。同小では、全校児童の約66%が外国にルーツをもつ児童が在籍している。我々は、日本語教室でのNIEによる「交流」ということに重きを置いてきたが、B小では、外国籍児童が多いために、彼らの間で通常学級でも「交流」が当たり前のことのように行われていた。従ってB小には、日本語教室単独でNIEを行うのではなく、通常学級NIEとの連携、または、外国籍児童の多く在籍する通常学級におけるNIE授業の提案が望ましいように思われたのである。

4. まとめ

本研究の主たる成果は、小学校日本語教室で「切り抜き新聞」作りの実践が教育的な価値を持つものとして実施可能であることを示したことにある。

（1）　紹介した実践で実施した「切り抜き新聞」作成の手順は以下のようなものであった。1枚の台紙（A3）に記事や写真を貼って感想を書く「おすすめ記事」の作成の段階から、最終的に模造紙大の切り抜き作品の制作を行うという段階まで数時に渡る一連の流れがある。それぞれの段階の1コマ分の授業で次のような指導案を作ることが可能である。（ア）導入（例）メキシカンハットの作製、（イ）『こども新聞』から好きな記事を切り抜く、（ウ）台紙に貼る、（エ）コメントを書く（日本語と自分の国の言葉）、（オ）交流する。

「切り抜き新聞」作りの作業の過程で日本語の修得水準にかかわらず、児童には次のことが可能であることが確認された。①記事を選んで切り抜くこと、②切り抜いた記事を構成すること、③共有する課題で学び合うこと。またその副次的な教育効果として児童の母語保持の機会を提供しうること。

（2）　身の回りにとどまらず、日本の様々な問題

に目を向ける発端を提供しうること。日本社会についての知識を増やし、日本社会の一員としての自覚を促す機会ともなり得ることが明らかとなった。

以上の（1）（2）から、NIE の一つである「切り抜き新聞」作りは、通常学級におけるものに勝るとも劣らない教育効果が期待できることが明らかとなった。

しかし、以上の教育効果は特に読み取りの面について確認されているという点に注意しなければならない。紹介してきた実践では、書く能力の向上が確認されていないのである。書くことの能力の育成には、読むことの能力以上により計画的な指導を試行して確認していくことが必要だと思われる。その成果を得ることができれば、一人一人の「特別の教育課程」に「切り抜き新聞」作りと連動させた文字指導を入れ込むことができる日が来るのではないかと思われる。

なお、広瀬小よりもずっと外国籍児童の比率の高い愛知県 B 小では、在籍する通常学級での NIE の指導モデルを開発すべきだと感じられた。あるいは日本語教室 NIE と通常学級 NIE との連携も試行すべきであるよう思われた。

注 1　公益財団法人理想教育財団が無料配布する大判サイズの「はがき新聞」用紙。

【文献】

（1）　所澤潤（編）（2010）　教職大学院生による授業の試み　p.319-339　平成 18 年～平成 21 年度　日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）研究成果報告書「来たるべき日系南米人児童生徒就学義務化に対応する教育条件整備と教員養成・研修の研究」（研究代表者所澤潤）（研究課題番号 18330163）

【付記】

本実践は、平成 28 年度～平成 31 年度 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究 B「異文化対応能力育成教育と外国人児童の就学促進 – 先進諸国の多文化的教室の現場から」（研究代表者所澤潤）（JSPS 科研費 JP 16H03787）による研究の一環として実施している。本実践の発案は所澤が行い、授業実践は神部が行い、撮影と記録とその整理は佐藤が行い、企画と執筆は神部、佐藤、所澤の三者が共同で行った。

【謝辞】

われわれの実践を高く評価し、2 年間という長い間、日本語教室に入ることを許可してくださった群馬県伊勢崎市立広瀬小学校の矢島祐介校長先生、日本語教室担当の佐藤里恵先生、一緒に NIE に取り組んでくださった日本語教室の皆さんに心から感謝申し上げます。

また、愛知県での実践の機会を与えてくださった愛知教育大学の川口直巳先生はじめ愛知教育大学地域連携センター外国人児童生徒支援リソースルームの皆様に感謝申し上げます。

愛知県小学校の先生方と日本語教室の児童の皆さんにも感謝申し上げます。笠松志奈先生、齋藤綾子先生には特にお世話になりました。おかげさまで、われわれの実践が大きく広がりました。本当にありがとうございました。

【記事】「日本 NIE 学会で取り組み報告」（中日新聞 2017 年 12 月 10 日）

日本NIE学会で取り組み報告

授業などで新聞を活用するNIE（教育に新聞を）の意義や研究成果を話し合う日本NIE学会（会員約三百六十人、二十団体）が十一月二十五、二十六日、京都府宇治市の京都文教大で開かれた。自由研究発表では、教員や研究者がこども記者活動や日本語学習などさまざまな場面で取り組んだ実践について報告した。一部を紹介する。

日本語学級の児童作品を見せて説明する神部秀一教授＝京都府宇治市の京都文教大で

日本語学級の実践

読み書き向上に手応え

NIEで楽しい日本語学習ができたら―。東京未来大こども心理学部の神部秀一教授（六）らは昨年度、群馬県伊勢崎市広瀬小学校の日本語学級で、切り抜き新聞作りをした。対象はベトナムやブラジル国籍などの五年生五人で、いずれも勉強する時に使う「学習言語」としての日本語は不十分。読み書きの力を向上させ、かつ母語も保持する。その上で、日本社会への理解を深めるのが目的だ。

使ったのは全国紙が発行することも新聞。好きな記事や写真を切り抜き、日本語や母語で見出しや感想を書き込む。四十五分間の授業で、A3用紙に各自が動植物やスポーツの記事を貼った。「でかい魚なだね」「サッカおもしろいね」など単語に間違いはあったが、鉛筆は動いた。

校長からは「予想以上に貪欲に記事を読めた」と好評だったという。神部教授らは「新聞は他のメディアと違い、手に取って触れる。宝探しのような楽しさがある」と強調。感想から各児童が日本語のどこでつまずいているかが分かり「指導に生かせる」と話した。

ただ、回数は昨年度は二回だけ。本年度も二年生以上に四～六回と少なく、日本語学級の担当教諭に新聞を使った授業を合間にしてもらうなど工夫をしている。「日本語学級で新聞を使うことはハードルが高く、まだ実践は多くない」と神部教授。今月以降は愛知県でも試行し、広げていく。（世古紘子）

2017.12.10 中日新聞

（かんべ　しゅういち）東京未来大学
（さとう　ひさえ）　東京未来大学非常勤講師
（しょざわ　じゅん）東京未来大学